

優秀賞

走り出した心

福岡県 福岡県立小倉高等学校二年 吉田 純梨

感動作文を書こう。日常の感動体験、心が動いた瞬間……。思考が停止する。最近、私は感動しただろうか。感動？いつした？

毎日毎日、課題や予習に追われ、自分の時間と言えるものなどトイレの中ぐらいしかない。やってもやっても追いついても追いついても、次から次へと出される課題。心が解き放たれる本当の意味での休みなど一日も一分もない。私は、狭い世界に閉じこもっていると感じる。狭い机、狭い教室、狭い家、狭い部屋、狭い視野、狭い心。何もかもが狭く窮屈に感じる。今の私には、感動などというキラキラしたものが入り込む隙など少しもない。たとえ目の前にあったとしても、まぶしすぎてきつと受け入れることができないだろう。私の心は狭く、そして淀んでいる。

夏休みに入っても、私は一人勝手に心を閉ざしていた。目を背けたくなる膨大な量の課題。それしか見えない。狭い心。毎日を淡々と過ごすしかない。その日のやることリスト達成を目指すだけの毎日。得体の知れない焦り

走ることが大好きだった頃の自分を少し思い出して心が少しざわついた。

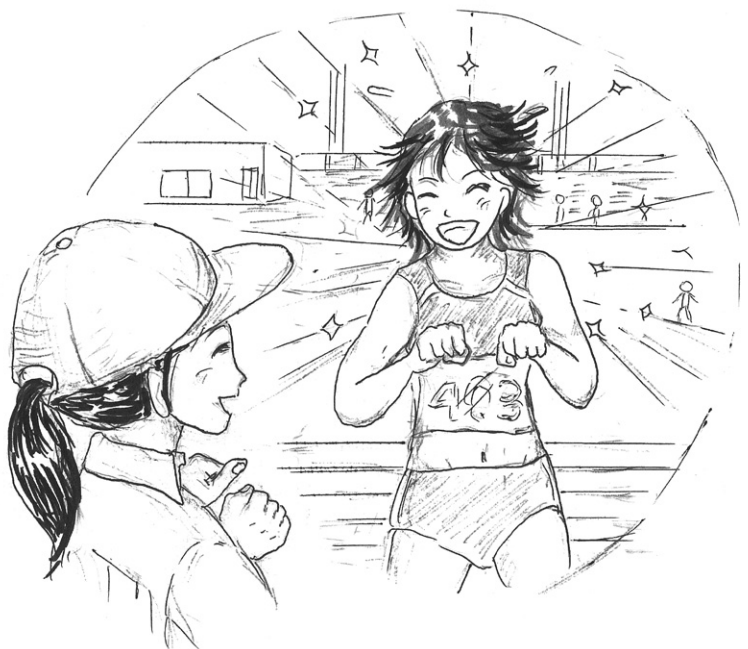
いよいよインターハイ本番当日。久しぶりの緊張感と試合独特のシビアな空気感にそわそわした。朝早くから、待機場所の設置、氷やお弁当の手配、ウォーミングアップの付添いなど時間はどんどん流れていく。時間の経過とともに私の心の温度も上がっていく。友だちをスタートラインに送り出す。専門の監督がいなければかりか、学校に練習場所もなく勉強にも追われながら、彼女は毎日毎日走っていた。真摯に愚直に目標に向かって努力していた。同じような環境の人がこの舞台上に一人でもいたのだろうか。それほど過酷で稀有なことだ。しかし、スタート地点に立った彼女は、一切の弁明も必要とせず、猛者たちと堂々と脚を並べていた。努力が報われてほしいなどとそんな簡単なことではない。そこに立った瞬間に彼女の努力は形になり、さらに食欲に執拗に自分の限界を超えようともがき続ける。彼女は、戦い続けることができる強靱な精神と身体を、圧倒的な努力によって手に入れている。

走り終えた彼女は、まぶしすぎるほどの笑顔で私の所へ駆け寄ってきた。周囲の期待を背負いながら、自分ができることやるべきことを全力でやりきり、周囲への感謝を述べる彼女。その美しく清々しい心情と行動に、私の心は熱くなり膨張した。「尊い」とはこういうことを

のようなものに追われ続けている。私は、こんな人間だったのだろうか。以前の私は、ミッシェンをクリアした自分を褒め、小さなことに感動し、涙し、心から笑っていたと思う。そう考えるとなんだか悲しい。

八月。インターハイに出場する陸上部の友だちのサポートで、私は徳島に行くことになった。四泊五日の旅だ。心に居座る謎の焦りに追われている身としては五日間も陸上に捧げるのは正直つらい。サポートする友だちは私にとって尊敬できる人。一緒に頑張ってきた仲間。何を置いても全力でサポートしたい。そのはずなのに、私の狭い心は素直に喜ぶことを許してはくれない。スーツケースに大量の課題を詰め込んで、徳島へ向け出発した。

徳島着。会場への移動、荷物運び、練習のサポート、宿舍での洗濯などの仕事に追われた。ゆっくり勉強する時間などとれるわけもない。今は目の前のことに集中しようとするでも頭を切り替え、私の狭い心に鞭を打ち続けた。友だちの真剣な練習に付き合ひ、会場の熱気やピリピリとした緊張感に触れ合ううち、陸上が好きで、



表すのではないだろうか。これこそが「感動」だ。私は久しぶりに味わった心震える感動を一人静かに噛みしめた。

徳島から帰着。スーツケースの約半分を占めた重たい課題は結局ほとんど手つかずのまま帰宅した。焦りや罪悪感につぶされそうになる。明日からもまた続く辛い我慢の日々。しかし、以前とは少し受け止め方が違う気がした。とりあえず走ってみた。ゆっくりだけど、汗をかき走ってみた。月がとてもきれいだった。明日も頑張ってみるかという気になれた。そして、本を読んてみた。ずっと読みたかった本を一気に読んだ。物語にのめりこみ周りの音が聞こえなくなった。心が少し柔らかくなった気がした。大好きだった陸上と読書の時間を少しだけ取り戻すことができた自分の心の変化が心地良かった。そうやって私は小さな感動を作っていく。探していく。そんな日々を積み重ねられたら、いつか自分の行いや結果に感動して、自分のことを誇りに思い尊ぶ瞬間があるかもしれない。そう信じていたい。

また私の戦いが始まる。しかし、今までとは少し違う戦い方になるだろう。自分を信じて大胆に自由に私は戦う。